

香川県庁舎東館の文化的価値について

1 概要

香川県庁舎東館(昭和33年竣工)は、伝統的な日本の木造建築をコンクリートで表現したことや、県民に開かれた空間を積極的に採用していること、芸術家との協働、センター・コア・システム等が高く評価されるなど、高い文化的価値を有しています。

また、戦後まだ権威的な庁舎が主流だった昭和30年代前半に、県民が気軽に立ち寄り、くつろぐことができる民主的で「開かれた庁舎」を確立しました。その後の我が国の庁舎建築のモデルとなったとも言われています。

2 文化的価値の主な要素

(1) 県民に開かれたオープン・スペース

開放的なピロティやロビー、築山の舞台をもつ南庭が緩やかにつながる、豊かな空間の構成。



(2) 伝統からの創造

木造建築をイメージさせる柱と梁の組み合わせ、また勾欄(手摺)付のベランダなど、伝統的な日本の木造建築をコンクリートという近代的な素材で表現。その前には、人々の豊かな暮らしへの願いが込められた、日本庭園としての南庭が展開。



(3) 芸術の総合

全面ガラス張りの開放的なロビーと調和した、本県出身の洋画家 猪熊弦一郎 の壁画「和敬清寂」。日本の伝統的な意匠と近代的な素材・技術を組み合わせ、インテリアデザイナー 剣持勇 の手による家具デザイン。



(4) 国内初のセンター・コア・システム

高層棟の中央に、コンクリートの耐震壁を置くことで、構造的に建築の「背骨」とする、国内初の試み。コア内部に階段・エレベーター・トイレなどの共用施設を収めることで、間仕切り自由な執務空間が実現。



(5) 地域色豊かな空間

庵治石や小豆島、坂出などの石材を使用した床石・庭石・灯籠。後藤塗の県庁ホールの扉。また、地元職人の手仕事(型枠組)による端正なコンクリート面の実現。



3 主な受賞歴

第1回BCS賞(建築業協会賞)、公共建築百選(※1)、DOCOMOMOJapan(※2)20選

※1 建設省設立50周年を記念して選定した100件のすぐれた公共建築物

※2 ドコモモ・ジャパン:近代建築の記録と保存を目的とする国際組織の日本支部